

富山市立図書館

図書館だより 第22号



5月31日(水)、八尾在住の作家、桐谷正氏の講演会がありました。
演題は「八尾曳山の文化的背景を探る～江戸期版本文化と彫刻工芸～」でした。

目次

特集 全国中核市・市立図書館の活動指標	2・3
いちおしライブラリー 第10回 「家族の絆を考える本」	4・5
地域館紹介 vol.6 「富山市立細入図書館」	6
山田孝雄文庫の資料 22 「遊仙窟(ゆうせんくつ)」	7
レファレンスあれこれ	8

特集「全国中核市・市立図書館の活動指標」

平成18年度



1 登録率

(貸出登録者÷市の人口×100)

中核市の平均は30.4%。富山市は、35.4%。
中核市35館中、13位となっています。
富山市は、分館や自動車文庫によるサービス網の整備が進んでいることから、資料を借り出そうという意思を持った利用者が比較的多いようです。
最高は旭川市の52.4%。

2 市民1人当たりの貸出冊数

(個人貸出冊数÷市の人口)

中核市の平均は3.9冊。
富山市は、4.3冊で中核市35館中、12位となっています。
最高は豊田市の8.0冊。

3 貸出密度

(個人貸出冊数÷登録者数)

中核市の平均は16.3冊。
富山市は、12.1冊で中核市35館中、16位。
最高は高知市41.0冊となっています。
この指標は、年間に登録者(利用者)1人当たり何冊貸し出されたかを示す、実質的な利用状況を測るものです。登録者が少ない場合や、1人当たりの貸出上限冊数が大きい場合は、この数値も高くなります。
(例：高知市や岡山市)

4 蔵書回転率

(個人貸出冊数÷蔵書数)

中核市の平均は2.1回。
富山市は、1.8回で中核市35館中、23位。
最高は新潟市3.1回となっています。
この指標は、1冊の蔵書が平均して、何回貸し出されたかを示すものです。新刊図書の購入冊数や開架図書の冊数に対し、書庫蔵書の割合によっても大きく左右されます。



5 市民1人当たりの蔵書冊数

(蔵書数÷市の人口)

中核市の平均は1.9冊。
富山市は2.3冊で中核市35館中、9位となっています。
最高は高槻市3.4冊。
この指標は、地域社会における図書館の力を示しています。また、図書保障率とも呼ばれていて、蔵書の魅力を如何に維持してゆくかが鍵となります。

6 市民1人当たりの図書購入費

(図書購入費÷市の人口)

中核市の平均は174.6円。
富山市は187.2円で中核市35館中、12位。
最高は豊田市540.0円。また、金沢市186.1円、新潟市222.9円、長野市198.4円となっています。

7 購入図書の平均単価

(図書購入費÷図書購入冊数)

中核市の平均は1,876.5円。
富山市は1,882円で中核市35館中、15位。
最高は函館市の3,705円。

8 その他

「貸出コスト」や「行政効果」の指標については、基礎数字にばらつきがあるために必ずしも正確とは言えませんが、参考までに紹介します。

8-1 貸出コスト

(図書館費÷個人貸出冊数)

富山市は354.2円。
また、岐阜市239.1円、金沢市339.1円、長野市259.3円となっています。

8-2 行政効果

(購入図書の平均単価×個人貸出冊数
－図書館費)÷人口

富山市は6,558.6円。
また、岐阜市4,388.3円、金沢市8,146.7円、長野市5,463.5円となっています。
この指標は、総供給数から総経費を引き、市民1人当たりに対しての、図書館サービスの還元割合を金額で示したものです。

中核市・市立図書館の活動指標比較表

平成18年6月調査(35都市からの回答による)

現在中核市は36都市あります。しかし長崎市には市立図書館がありません。

No	中核市名	貸出上限冊数 (1人当たり)	登録率	人口密度	貸出冊数(市民1 人当たり)	貸出密度	蔵書回転 率	蔵書冊数(市民1 人当たり)	図書購入費(市民1 人当たり)	購入図書の平均 単価	貸出コスト	行政効果
1	富山市	10	35.4	336.0	4.3	12.1	1.8	2.3	187.2	1,882	354.2	6,558.6
2	旭川市	10	52.4	478.0	6.1	11.6	2.3	2.6	141.6	1,401	129.3	7,737.8
3	函館市	10		434.8					317.6	3,705		8,165.9
4	秋田市	5	12.9	365.4	2.6	19.8	1.5	1.7	130.0	2,402	179.1	5,675.9
5	いわき市	15	14.3	286.2	3.9	27.5	3.0	1.3	159.5	1,868	1282.8	2,302.6
6	郡山市	5	40.1	446.4	3.9	9.7	1.7	2.3	193.0	1,518	147.7	5,357.0
7	宇都宮市	15	41.0	1,462.5	5.9	14.5	2.5	2.4	211.5	1,378	143.7	7,331.0
8	川越市	5	43.7	3,047.2	3.7	8.4	1.7	2.2	95.5	1,752	248.1	5,490.1
9	船橋市	10	29.5	6,688.0	3.1	10.4	1.7	1.8	195.3	2,202	186.3	6,198.3
10	横須賀市	10	46.9	4,204.0	3.4	7.3	1.9	1.8	163.9	2,186	380.0	6,196.8
11	相模原市	6	38.3	2,733.9	4.3	11.3	2.5	1.8	123.1	1,723	152.9	6,783.3
12	長野市	10	16.1	46.8	3.7	22.9	1.8	2.1	198.4	1,738	259.3	5,463.5
13	新潟市	10	10.0	2,223.2	2.9	28.9	3.1	1.4	222.9	2,121		
14	金沢市	10	44.1	968.1	4.4	9.9	1.9	2.3	186.1	2,269	339.1	8,146.7
15	浜松市	6	38.9	541.0	4.6	11.7	1.8	2.5	209.4	1,794	336.3	6,643.7
16	豊橋市	5	47.4	1,452.0	3.6	7.7	1.5	2.4	159.7	1,771	320.4	5,281.3
17	岡崎市	10	32.7	949.9	3.9	11.8	2.5	1.6	176.4	2,036	300.6	6,719.6
18	豊田市	15	51.4	448.8	8.0	15.5	2.5	3.2	540.0	1,947	200.4	13,942.2
19	岐阜市	10	16.6	2,080.4	2.9	17.3	2.4	1.2	83.9	1,766	239.1	4,388.3
20	東大阪市	8	7.8	8,271.3	3.2	40.5	2.5	1.3	105.0	1,335	141.7	3,768.9
21	高槻市	10	22.6	3,377.7	6.8	30.2	2.0	3.4	334.7	1,886	348.9	10,459.3
22	奈良市	5	27.3	1,729.7	3.3	12.1	2.1	1.5	136.9	2,345	129.6	7,316.8
23	和歌山市	5	34.7	1,801.9	1.8	5.3	1.7	1.1	87.1	1,912	470.6	2,640.4
24	姫路市	6	17.5	1,001.7	4.1	23.2	1.8	2.2	128.9	1,574	168.6	5,711.0
25	岡山市	無制限	13.9	1,012.7	5.2	37.2	2.6	2.0	191.9	1,771	171.6	8,289.9
26	倉敷市	20	14.9	1,339.4	5.1	34.3	2.1	2.5	160.1	1,291	243.5	5,348.2
27	福山市	10	31.9	891.8	4.9	15.5	3.0	1.7	156.9	1,642	222.0	7,297.3
28	下関市	10	27.2	411.9	3.6	13.1	2.0	1.8	145.8	1,670	108.9	5,551.8
29	高松市	15	49.3	1,131.8	4.7	9.4	2.1	2.2	157.2	1,979	288.7	7,863.4
30	高知市	10	11.0	1,239.8	4.5	41.0	1.9	2.4	260.4	1,612	329.0	5,780.1
31	松山市	5	40.1	1,195.5	3.4	8.4	2.5	1.4	129.5	1,471	270.0	4,044.7
32	大分市	5	30.2	927.8	1.6	5.2	1.7	0.9	82.9	1,826	377.5	2,272.1
33	熊本市	6	28.1	2,500.7	2.8	10.0	2.2	1.3	130.4	1,564	117.2	4,070.4
34	宮崎市	5	30.7	1,278.2	1.5	4.9	1.7	0.9	86.8	2,440	358.5	3,112.7
35	鹿児島市	5	34.3	1,102.9	2.4	7.0	1.9	1.3	112.0	1,901	217.7	4,023.4
平均値			30.4	1,668.8	3.9	16.3	2.1	1.9	174.6	1,876.5	278.6	6,056.9

(注) 回答項目に異なる数値が記入してあったり、回答が得られなかったなど、指標化できなかった欄は、◆で表記しました。

東大阪市と高知市の登録者数は平成17年度の単年度分だけです。

函館市といわき市の図書館費のなかには図書館建設費を含みます。

21世紀はテロの恐怖と大不況で始まった。こうした不安と混迷の時代を生き抜くとき、そして次代にわれわれの「命」を引き継いでゆくとき、人間の基本単位である「家族」の大切さを改めて感じさせられる。

父や母はどうあるべきか、変容する子どもにどう対応し、二世三代の家族とどのような暮らしを営むか、これらの正解は見つからないまでも、考えるヒントとなりそうな本を探してみた。

変わる家族・変わらぬ家族

少子化が家族をどう変えるか。

『**変わる家族・変わらない絆**～ともに支えあう少子化社会をめざして～』（**袖井孝子著 ミネルヴァ書房**）で、著者は昔の家族を懐かしんでも始らないという。「家」から核家族への変化は、やがて「集団から個人への変化」となるという。そして自然発生的な家族から、主体的選択に基づく家族となり、家族の絆を維持するには、自然に任せているだけでは不十分であり、人為的な努力を傾けることが必要になるという。

雑誌「週刊社会保障」などに掲載された小論をまとめたものだが、現在の家族と今後の家族を社会科学的に概観するのに好適な、手軽に読める小論文集である。

人為的努力ということについては、

『**家族を「する」家**～「幸せそうに見える家」と「幸せな家」～』（**藤原智美著 プレジデント社**）

の著者も、同じことを述べている。

この本は『**家をつくる**』ということ』に続いて芥川賞作家藤原智美が、家族と家をめぐることが考察したものである。食卓も情報も、家族単位でなく個人化してきている現代は、「家族をする」ことが求められる時代だという。

さて、吉本隆明といえば「共同幻想論」や「言語にとって美とはなにか」などを書いたかなり硬派な論客だが、今や氏も80歳になりなんとする老年期を迎えている。

『**家族のゆくえ**』（**吉本隆明著 光文社**）

は、作家吉本ばななを育てた評論家の書いた家族論、である。冒頭に新約聖書「マタイ伝」の一節を引用しながら、「信仰」に一番敵対するのが「家族」であり、「家族」は信仰や法律、社会、一個人とも異なる位相にあるとして論を始める。

子どもが誕生したときから家族が始まり、子の成長に合わせて論を進めるが、分りやすいことばで語りながらなかなか鋭い考察が散りばめられている。中でも子育てには二つの重要な時期があるという。幼児期と前思春期にしっかり子どもを受けとめてやれば、あとは大丈夫だというのが吉本の見識である。

家族が家をつくる・家が家族をつくる

家族が暮らす家が、また家族をつくる。戦後日本の住宅と家族の変化とは、密接な関わりがあった。

『**家をつくって子を失う**』（**松田妙子著 住宅産業研修財団**）

は著者が街角で経験した苦い思い出をきっかけとして、戦後の住宅建築と家族の関係を考えたもの。

住宅数が世帯数に追いつき「一世帯一戸」の目標を達成したのは昭和43年だそうだが、その後さらに「一人一部屋」をキャッチフレーズにして住宅建築が進められた。

しかし、子ども部屋の個室の是非や、住まい方の検討が置去りにされ、今もって子ども最優先の考え方が大勢を占めている。著者はこのことに警鐘を鳴らし、主（あるじ）を重んじる住まい方をしてほしいと主張する。

子ども部屋をつくり、子育てを終えられたかたの中には、同じ思いを抱かれるかたもあるのではなかろうか。

『古くて豊かなイギリスの家便利で貧しい日本の家』(井形慶子著 大和書房)

これは目をイギリスに転じ、日本と比較した住宅論である。

「日本人の住宅観には思想がない」「どんな暮らしをしたいか家からは見えてこない」というのが著者の感想である。収納や機能にこだわりすぎる日本、子ども部屋に机がないイギリス、など余りに住宅に対する考え方がちがうが、著者は日本人の考え方より、イギリス人の考え方のほうに分があるのではないかと考える。

同じくイギリス人の暮らしぶりを書いたものとしては、こんな本も。

『英国式スローライフのすすめ 簡素でゆたかな暮らし方』(大原照子著 大和書房)

イギリスと日本では、もとより歴史も文化も異なるが、イギリスの老人たちの暮らし方には、私たちが忘れてしまったものが残っているようである。少ないモノで身ぎれいに暮らし、身の丈にあった生活感覚を持ち、毅然と老いに立ち向う。いうは易く行うは難しというところであろうか。

家族の情景・家族の絆

「家族」、「家」というのは日本の近代文学の主要なテーマでもあり、そうでないものでも家族が濃厚に描かれている。

『泥の河』(宮本輝全集第1巻 新潮社)

昭和20年代末ころか30年代初めの日本の普通の家族と子どもの情景が描かれている。昭和20年代に生れた者には懐かしくもあり、哀しくもある風景である。船上生活者の喜一少年と主人公信雄の出会いと別れの話だが、主人公とその父と母の生活が、当時の日本の「家族」を実感させる。この短い小説に描かれた家族は、戦後生まれの「原風景」のように感じられる。大阪弁とは、なんとも切ない日本語か、と感じさせる秀作である。

『あかね空』(山本一力著 文藝春秋)

時代小説というのは時代背景を江戸時代に借りながら、登場人物やテーマは現代に通じるものを持っている。「あかね空」は京から江戸に出て一旗揚げる豆腐職人永吉とその家族の物語である。なにもかも努力によってうまくいくのだが、長男栄

太郎が生まれ、二男悟郎、長女おきみが生まれるにつれ、女房おふみの様子が変わってくる。

時代背景は江戸中期だが、戦後高度経済成長期を生きた家族にも通じるものがある。退屈させず一気に読ませてしまうのは作者の筆力もさることながら、「家族愛」「家族の絆」がテーマになっているからだろう。

『思い出トランプ』(向田邦子著 新潮社)

向田邦子の作品は「父」「家父長」や「家族」をテーマにしているが、シナリオと随筆が多く、小説としては、この短編集がおすすめである。さまざまな「夫婦」の情景が描かれる。何度読んでもこのドラマの中に引き込まれるのが不思議だ。

『おやじのせなか』(朝日新聞社会部編 東京書籍)

これは朝日新聞教育面に連載された各界著名人の「おやじ」たちの生き方を綴った「おやじのせなか」を単行本化したもの。社会のルールや善悪の判断を伝える役目を負うのが父親だと言われる。この「おやじのせなか」ではかつてのたくましい、或いはダメおやじや不良おやじが登場する。少しは自信が持てるかも。

そして最後は、少々哲学的なエッセイでしめくくことにしよう。

『男の未来に希望はあるか』(細谷実著 はるか書房)

筆者によれば、「家族についての哲学っぽい本」を求められて執筆した結果できた本とのこと。

題名からはなにか「トホホ的」な印象を受けるが、内容は男性、父性を考えたエッセイである。

(奥田北分館 三上)



地域館紹介 Vol.6 富山市立細入図書館



細入図書館は、細入公民館の地下1階の一室に開設されている面積75㎡、蔵書数10,700冊、閲覧席12席の小さな図書館です。

平成16年度までは、教育委員会や公民館の職員が業務を行なっていましたので、十分な図書館業務も行なえない状態でしたが、17年度からは図書館所属の職員が配置され、蔵書の整理や環境整備、情報提供が行なわれるようになりました。

住民の皆さんが情報の収集に利用できるようパソコンも設置され、細入図書館にない本が相互貸借により借りられるようになり、利用者数も貸し出し数も増加してきています

また、17年度から地域内2カ所へ自動車文庫の巡回が始まり予想以上に多くの皆さんに利用していただいています。

読みたい本の情報を聞き取って次回にはできるだけ要望に答えられるような本を積載してきていただけるということが利用者に好評を得ているようです。

細入地域では小学校と中学校の併設が計画されており、併設の際には細入図書館もこの学校の図書館に併設することが計画されています。

地域の皆さんにとって今よりも利用しやすく、小中学校の児童生徒にも利用勝手が良い図書館になると大きな期待をしています。

これからも住民に愛され、親しまれる図書館を目指して行きたいと思えます。

細入図書館の概要

所在地 〒939-2184

富山県富山市榆原1077番地

電話 (076) 485-9004

FAX (076) 485-9012

開館時間 午前8時30分～午後5時

休館日 土・日・祝日 年末年始

交通機関 JR高山本線

榆原駅下車 徒歩1分

地铁バス猪谷方

榆原駅下車 徒歩1分

蔵書数 一般書：7,597冊

(うち寄贈図書4,694冊)

児童書：3,119冊

特徴 本田氏(旧細入村住民)

寄贈による本田文庫収蔵

沿革

・昭和56年7月

旧細入村役場庁舎内に図書館開館

・昭和61年4月

現公民館内に移転

・平成9年

本田氏より寄贈(本田文庫)

・平成17年4月

市町村合併により富山市立細入図書館となる。

自動車文庫巡回開始

(細入教育行政センター 戸田)



唐・張鷟（ちょうさく）作 山田孝雄 昭和8年
 [1933] 写 [55] 丁 31.2×20.8cm
 題簽〔山田孝雄自筆〕：「遊仙窟 真福寺本」首題：
 「遊仙窟一卷」扉：「遊仙窟 真福寺本寫」原本扉
 「遊仙窟一卷／賢智」奥書：「文和二年九月廿四日
 於加州能見郡板津庄今添中嶋大日／寺学所書寫畢
 ／〔以下朱書〕右遊仙窟一卷墨附五十二丁以大須
 宝生院所藏之本不違一字一畫親模／寫一校了 安
 政六年乙未八月 奥田義雄（花押）〔以上本奥書〕
 ／右名古屋真福寺藏遊仙窟鈔本羽塚啓明氏／藏本
 ヲ借り得テ之ヲ影鈔セシメ自ラ校合シ了リヌ／于
 時昭和八年十月十五日 山田孝雄」

『遊仙窟』は唐代の伝奇小説である。あらすじは、
 「作者が河源に使用して神仙の窟に迷い込み、五
 嫂・十娘の両仙女に会って宴楽歓語し、詩句を以
 て相對応し、ついに十娘と結ばれるという筋」（『中
 国学芸大事典』より）で、「詩歌に隠語を用いて猥
 褻にわたるところがある」ともいう。

当時は流行し、わが国にも伝えられたが、中国
 ではその後失われて、日本だけに残るいわゆる佚
 存書である。

山田孝雄博士がなぜそのような書を書写せしめ
 自ら校合したのか。そのあたりの事情は、山田孝
 雄博士が次のように書いているので、推察するこ
 とができる。

「本書ははやく日本國見在書目録にも見えてる
 が、その我國に入りしはかの唐書にいへる如く、
 わが遣唐使の携えかへりしによるものなるべきが、
 〔中略〕億良の文中には孔子の語、佛經の語、抱
 朴子、帛公略説などいふ書をも引けるなれば、當
 時この書を經子に伍して怪しまざりしを想ふべき
 なり。〔中略〕



本書は平安朝に入りては益ひろく行はれしもの
 と見え、かの源順が、勤子内親王の令旨を奉じて
 撰せし和名類聚鈔に本書の訓を典據として引ける
 ところすべて、十四條あり。而してその典據とせ
 るもの漢籍にても爾雅、説文、唐韻、玉篇、詩經、
 禮記、史記、漢書、白虎通、山海經等、本朝の書
 にては日本紀、萬葉集又式などなり。即ちこの時
 これらの諸書と相伍して重んぜられしを見るべき
 なり。〔中略〕

以上の如くなれば、本書は一篇の短き小説なりと
 いへども、わが文藝の源流の一として古典を探らむ
 とするものの必ず坐右に備ふべきものたるのみな
 らず、國語學上また重んずべきものとして古來學者
 の問に重要視せられたるものなり。その故は、か
 の和名類聚鈔が本書の訓を以てその出典とせる如
 く、本書の訓には古語の傳へられたるもの少からざ
 るを以てなり。〔中略〕なほ本書の訓讀に用みたる
 假名の字體の如きも亦わが文字史上價值多き資料
 たること學界の定論なれば今贅言せず。」

つまり、わが国の古語や漢字の訓讀、および古
 典文学の研究には必備の書ということである。

山田孝雄旧蔵の古典籍の層の厚さはこの一点に
 とどまらず、刊本一種と『遊仙窟鈔』なども所蔵
 している。 (本館 亀澤)

<おわび>

図書館本館西側の外壁化粧版落下に伴う補修工事のため、
 6月15日から7月2日まで臨時休館いたしました。市民の
 皆様にはご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

レファレンス

あれこれ

図書館に寄せられる質問の中には、ある事項の出典や由来について尋ねられることがあります。しかし、必ずしもそれらの答えがみつかるとはかぎりません。はっきりとはわかっていないもの、調査したが不明という結果に終わることも多いのです。

ここでは、幸いにして回答が得られた質問を2つ、ご紹介します。

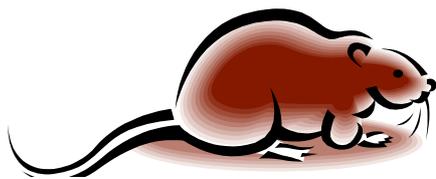
Q. 「ねずみのよめいり」の昔話の成立について知りたい。御伽草子が原典ではないか？

A. 「ねずみのよめいり」とは、ねずみの長者が娘に世の中で一番強い婿を、と探し歩いたところ、めぐりめぐってねずみが一番強いという結論にいたる筋書きである。

御伽草子が原典ではないかということなので、まず『お伽草子事典』(東京堂出版)で調べてみた。ねずみの物語としては「鼠草子」という物語があったが、話の内容は「よめいり」とはまったく違っていた。

次に、『日本昔話事典』(弘文堂)『昔話・伝説小事典』(みずうみ書房)を探してみると、「鼠浄土」「鼠経」「鼠の名作」といった物語が見つかったが、これらもやはり「よめいり」とは別の内容の話であった。

そこで『日本説話伝説大事典』(勉誠出版)を見てみたところ、ようやく「ねずみのよめいり」は『沙石集』に収録されていた笑い話を元に行っているということが判明した。



Q. 戦後の富山市で「富山復興の歌」という歌を唄っていたが、1番から3番まで歌詞があったように記憶している。その歌詞の全文を知りたい

A. 昔、富山市に住んでおられたという方からの質問。

音楽に関しては、もともと資料として残りにくいこともあり、郷土資料の中でも本が少ない分野である。

『富山大百科事典』『富山戦災復興誌』『富山市史』などの基本図書や、『観光富山県の歌』(串田清松)『とやまの歌リスト』などの郷土の音楽関係資料をひとつおりにあたってみたが、この「富山復興の歌」についての記述はまったく見つからなかった。

一方、富山の郷土史に詳しく、当館の図書館協議会委員をつとめておられる須山盛彰先生にお尋ねしたところ、これは昭和20年代の8月1日に行われた戦後復興祭で唄われたものではないかという話を伺うことができた。

そこで、それを手がかりに『富山市史』の昭和20年代前半の記事を探してみた。『富山市史』は編年体で書かれているので、時系列順にたどっていくと、昭和21年から23年にかけての8月1日に復興祭が開催されたという記事が出てきた。

『富山市史』には歌についての記述は何も書かれていなかったため、当時の新聞を富山県立図書館に依頼して調査してもらったところ、富山新聞の昭和21年8月1日号に、市民からの公募で「復興富山の歌」が選ばれたという記事が、楽譜・歌詞とともに掲載されていた。

(本館参考図書室・濱口)

平成18年7月26日 富山市立図書館 編集・発行
HPアドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp>

富山市丸の内1丁目4-50 TEL 076-432-7272
E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp